俺が世界の主人公

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が世界の主人公

【Ｎコード】
Ｎ８８０２Ｙ

【作者名】
柊

【あらすじ】
自分こそがこの世界の主人公と疑わない主人公が、異世界に飛ばされ頑張る話。

俺が世界の主人公

あ、どうも世界の主人公こと佐藤祐樹（さとうゆうき）です。
別に頭がおかしいわけじゃなくってね、（名前が普通だからって馬鹿にすんなよ）俺のプロフィールを見てもらえば納得だと思うんだよ。
成績優秀（学年一位）
眉目秀麗（もてまくってしょうがないね！）
武道の才能（武道系の部活のやつに勝てる）
人徳にも秀でる（普通こんな人間嫌われる）
気もきくし、苦手なものが存在しないどころか、他の人間より劣っているところが存在しない。
まさに万能の才人と呼ぶべき完璧人間。
別にこうなるために何か努力をしているわけでもないのに。
そんな俺の悩みは毎日に刺激がないこと。
それを解消するための唯一といってもいい趣味がゲームである。（この話題があるおかげで男子に嫌われない）
ファンタジー系のＲＰＧをやってはこんなモンスターと戦ったりする刺激のある毎日過ごしたいなーと思いつつも。
「またひとつ世界を救ってしまった」
つまりはゲームをクリアしたのである。
さて新しいゲームでもやるか―と思い、積みゲーの山に手を伸ばす。
「つい冗談で一年なのに生徒会長に立候補したらなれちゃったんだよなー」
そんで忙しかったからゲーム積んじゃったんだ。
「マジで刺激がほしいなぁ」
異世界で旅とかしたいなぁ（できれば勇者希望）

『汝異世界へ渡ることを望むか』

なんだこの頭の中に直接響くような声は。
ま、まさか！
これは夢にまで見た異世界への召喚か！
きっとこれで望むとか言えば勇者への出世コースまっしぐら！
「望む！」

『よかろう』

瞬間、俺は闇に飲み込まれた。
ん？闇？
闇の中で囁かれた。

『我の名は“…の神”』

それを聞いて俺の意識はなくなった。
目が覚め起き上がる。
下を見ると何やら幾何学的な模様の召喚陣っぽいものが。
はっ、やっぱり俺は異世界へ召喚されたんだ！
となると光の女神さまからのお告げ的なものがあるはず！
と思ったが何やら周りを見ると騒がしい。
「おお、ついに召喚なされました」
ん？俺のこと？
「あなたこそ……」
ふっ、テンプレどうりだな。
どうせそのあと、あなたこそ伝説の勇者様みたいなことをいうんだろう？

「“闇の神”に寵愛されし異世界からきた大魔道士となる方ですか？」

へ？

「えぇぇぇぇぇ！？」

俺が世界の主人公（後書き）

新シリーズもがんばります！

俺こそ主人公のはずなのに…

なんという事実を発表してくれたんだ司祭の方よ。
まぁ考えてみればその予兆のようなものはあったが、納得もできない。
予兆というのは最初っからして光の女神様的なものが来るようすではなかったし。（いきなり闇に覆われた）
納得できないのはなぜそんな大魔道士などというちょっと脇なポジションなんだ、普通のＲＰＧとかだったらストーリーに多大な異変はもたらすがすでに過去の偉人となっていたり、秘密を話してすぐ殺されたりなどなど。
たしかにおいしいポジションではあるが、前の世界では俺こそが世界の主人公という感じだったのになぜここでそのポジション？

「ま、いっか」
俺はただ刺激がほしかっただけだしな。
「で、この世界での俺の役目は？」
「おお、飲み込みが早いようで助かりますな」
まぁ心の準備はあったしな。
「勇者を隠れ蓑にし、最終的には魔王を倒してほしいのです」
「勇者を隠れ蓑に？」
ちょっと引っかかるな。
「ここは“闇の神殿”です、おそらくここから離れた所にある“光の神殿”でも勇者が召喚されていることでしょう」
「ならその勇者に任せればいいじゃん」
「実は神殿の奥に“闇の泉”と呼ばれる場所があり、そこにつかるとあなたの力が覚醒します」
急に何を？
「それと同じように、“光の神殿”の奥にも“光の泉”があり、そ

こにつかると勇者の力は覚醒するでしょう」
話をし始めた理由がわからない。
「ですが、勇者が泉につかったとしてもほとんどまともな力は得られないことでしょう」
「どういうことだ？」
「おそらくは勇者が得られるのは他人を引き付けることができる圧倒的なカリスマと小型の魔物などを追い払う程度の聖なる光でしょう」

「なるほど、実際に頑張るのが俺というわけだな」
「はい、なので街中でいきなり魔王を神とする邪教の信者などにメインに襲われるのは勇者です」
「ふむふむ」
歴史の表舞台に立つのが勇者なのはちょっと残念だが、俺の求めるスリリングな生活はできそうだ。
「じゃあ俺は今どうすればいい？」
「この奥の“闇の泉”に入ってください、闇の力の覚醒と“黒の魔導書（ブラック・グリモワール）”が授けられます」
「“黒の魔導書（ブラック・グリモワール）”？」
「それは後で説明するのでとりあえずもらってきてください」
「お、おう」
さすがにこんなことが人生で起こるとは高校生にもなって（本気では）考えていなかったのでドキドキする。
「よっしゃ！」
頬をたたき、気合を入れ先へ進む。
「んーなかなか長いなぁ」
いきなり先が見えないほどの長さの通路だった。
……十分後……
「おお、扉だ！」
通路は長く、もう何時の間にか辺りは黒一色の暗い空間になってい

たところに扉があった。
「よし開けるか」
扉はなかなか重く、ギギギギギと音を立て開いた。
「おぉー」
辺りの暗さになれ、周りが見えるようになり、見渡した扉の先はまさに感嘆の声を洩らすのも無理はない光景だった。
それは辺り一面の黒だった。
実は今までは黒という色に嫌悪感があった。
だがこの黒は不安を煽るようなものではなく、まさに透き通るとでも言えばいいのか、それほどに透明感があった。
とにかく辺りには、泉というよりも湖とでも言ったほうがいいのでは？と思うような透き通る黒があった。
「おっとこれに浸かるんだっけ」
さすがに不安になるので水を少し手ですくってみた。
「な！？」
なんだこれは！この手ですくったものは今まで触ってきた水とは違った。
手を傾けると何かが流れ落ちていく。
確かになにかを触っていた。
冷たくなかったがぬるくもなかった。
つまり温度は感じなかった。
今この手を流れ落ちていくのは水ではなく“何か不思議な力”のように感じた。
「よし」
だがなぜか安全を感じ、覚悟を決めた。
間違いなくただの人間ではなくなるという確証を持って。
足を踏み入れていく。
普通だったらどんどん不安になるところだがなぜか心が澄んでいく。
『汝力を求めるか』

あの時の声だ。
「ああ、もちろんだ」
『まず闇を操る力を与えよう』
泉に満ちる力が流れ込んでくる！
理解した、きっとこの泉に満ちる闇を自分は操ることができるだろう。
『その闇は身を守る最強の盾だが剣にはなりえない』
それも何となくだがわかる。
『黒の魔導書（ブラック・グリモワール）をやろう』
少し離れた手の届かないぐらいのところに一冊の本が現れた。
闇を使い手元まで持ってくる。
今闇を使ったがおそらくものを動かすならこの程度しかできないだろう。
「ありがたく受け取るよ」
ここに来る時は長かったが、今はこの力がある。
体が闇に包まれた、すぐ闇は解かれその場所は長い通路の入り口だった。
「いやー便利だなぁー」
ハマっちゃいそう。
「さて、戻るか」

俺こそ主人公のはずなのに…（後書き）

ちょっと真面目な感じになるのは珍しいです。

俺強えー！

「終わりましたよー」

「おお！お帰りになりましたか」
結構オーバーリアクションだな。
「で、早速だけどこれどうすりゃいいの？」
黒の魔道書を差し出した。

「それを読めばいいだけです」
「ずいぶんと簡単だなぁ」
ま、簡単っていいよね。
「そんじゃちょっくら」
パラパラーっと。
瞬間。
「ぐっ！」
知っているはずのない知識が頭の中を走馬灯のように駆け巡る。
「な　ん　だよこ　りゃ　あ」
思わず膝をつく。
「くらくらすんなぁ」
と言いつつもだいぶおさまってきた俺である。
「おそらくそれで魔法などを覚えたはずです」
ん、確かに頭の中にそれらしき知識がある。
「とりあえず軽いのうってください」
んーっと今おれが覚えているのはー

その一
死霊召喚　論外

その二
マインドコントロール　これも論外

その三
周囲２ｋｍから生命力を吸収　ドレインフィールド

その四
隕石を呼び、辺りを荒野に変える究極魔法　メテオスウォーム

なんかやばいのばっかだな…
まぁ、　黒の　と銘打つ魔導書だしなぁ。

お、イイの発見
ファイアボール
初級魔法みたいだしいいよね。
まずは魔力を集める。（初級魔法だし軽めに）
そして魔法名を宣言し、集めた魔力とともに放つ。（宣言するのはイメージを固めるため）

「ファイアボール！」

そして、手から放たれたのはメ〇ゾ〇マもびっくりの大火球だった。

「へ？」

ボッカーン
もちろんこんな生易しい音ではなく。
神殿の半分近くが吹き飛んだ。

因みに失敗の原因、集めた魔力多すぎ。

「いくら召喚された選ばれた人でも限度というものがあります！」
そして説教中…

……二十分後……

「まぁ、あなたにも修行の必要があるので、勇者はもう先に王城であいさつを済ませ、修行を始めたようです。あなたも混ざって来なさい、あなたは目立ってはいけないので、王へのあいさつは要りません」
つっかれたー
「はいわかりました」
俺めったなことで怒られないから説教なんてひさびさだなぁ。
「案内してあげなさい」
司祭はそこらの神官に言った。
なんかえらそー
「はいわかりました」

……道中カット……

ここは王城の訓練場。
えーっとさっき教えられた通りに。

「勇者様と同じ世界から従者となるべく召喚された大魔道士見習いの佐藤祐樹です」
俺のあいさつの相手はもちろん勇者のはずなんだが…
「えへへ、そんな畏まんなくていいですよー私は光（ひかり）　美輝（みき）です。気軽にみっきーとか言ってくれてもいいですよ？」
なんかほわほわした雰囲気の美少女だった。
「それでは光さんと呼ばせていただきましょう」

「んーもっと砕けてほしいんだけどなぁー」
さすがに初対面でそれはちょっと。
「ま、いいや訓練の続きがあるからまったねー」
「大魔道士さま、どんな訓練がよろしいですか？」
横からいきなり声がしたが、どうやらおれの訓練を担当してくれるようだ。
「うーん」
あの調子だと魔法の微調整はムズそうだなぁ。
頭の中の魔導書をめくる。
お、いい魔法発見、これなら。
「よし組み手をしよう、実戦形式の練習だ」
「？」

……一時間後……

「くっくっく、はーっはっはっは」
俺は死体の山を周りにつくり高笑いする。（別に死んじゃいない）
「弱い、弱すぎる、誰も俺を止められないのか」
俺の武器はナックル、グローブのようなものだ。
この武器にした理由が、空手とボクシングなら神の領域にある自信があったからというのと、これなら遠慮せずに使える魔法があったからである。
それは三つあり、一つ目が加速魔法、二つ目が身体強化魔法、三つ目が武器強化魔法である。
ともあれ今日の訓練時間は終了らしい。
とりあえず手でも洗うか。

修行だ修行！

「いやー！朝から気持ちがいいね！」
ここは前回と同じ訓練場。
騎士たちは朝早く訓練を始めるので、もうすでにみんな訓練に入っている。
どうやって昨日の夜を過ごしたのかというと、俺は騎士専用宿舎に泊めてもらった。

「さて、また組み手でもやりますかみなさん！」

「いやー今日は本調子じゃなくってね」
「ちょっと風邪がね」
「まだ死にたくない」
「おっと、早く練習をしなければ」
「持病の癪が！（ちらっ）」

ＯＫわかった。
俺は空気の読める天才だ。
「俺が本気で殴っても壊れないもんある？」
「おそらく壊れないであろうものならありますが」
「じゃあそれ貸して」

……十分後……

「よーしセッティング完了！」
瓦割のような感じでセットした。
これは魔法でコーティングした鉄板で、この国でもかなり硬いものなんだって。

そして俺のしたいこととは某バトル漫画で言う“気”のように魔力を使えないかということの実験。
魔法を使うと威力が高すぎて、あえて非効率的なことがしたいと思って考え付いた。
「さてと」
魔法を使わず、手に魔力だけを込める。
そして拳を振りおろすと同時に魔力を放つ！
「はっ！」

【ガイン！】
接点から衝撃波が生まれる。
【バキン！】

「あーあ砕けちゃったよ」
「そ、そんなバカな」
訓練をいつも見てくれている騎士さんがなんか驚いてる。
「これそんな堅くなかったよ？」
「これは大砲が何発あたっても砕けるはずのないようなものなんですよ？」
「はー」
魔力の直接運用はさすがに弱いかなーって思ったけど案外威力があるらしい。

「あなたはもっと細かい魔力の操作を学んだほうがいいですよ」
あ、やっぱり？俺もそんな気がしてた。
「なのでこれ使ってください」
ロウソクを一本渡された。
「これで何しろと？」
「魔法で火をつけるだけです」
「その程度か、楽勝だぜ！」

むむむー魔力を集めてー
「ファイア！」

【キュボ！】
「ワーオ、キャンプファイアー」
「意味のわからないこと言うより前に反省してください」
「サーセンした」
もう一度渡してもらったロウソクを使い挑戦。
さっきはこれ以上ないくらい魔力小さく入れたしなー

ここはあえての魔力全開！
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
【ズゴゴゴゴ】
「ファイア！」

……

まぁもちろん失敗だったけどね☆

俺たちの旅はまだまだこれからだ！（前書き）

初のまとも（まとも？）な戦闘シーンあり

俺たちの旅はまだまだこれからだ！

「ふぁーー」
なれない野宿に思わずあくびをしてしまった。
もうこの世界に来て一カ月か。
そう！もう旅立ってるんだよ！
それはまだ昨日の話。

……一日前……

「うーん！」

これまでのきつい訓練も終わり、結果そこそこ集中すればガスコンロレベルの火を出せるようになっていた。
それに光とも仲良くなった。

今日はいい天気だ！
窓の外で小鳥はさえずり暖かい日差しがさす。
ここまでいい天気だと呪われてるのでは？という気になる。
【ガチャ】
「サトウさんそろそろ始りますよ」
扉を開けて入ってきたのはいつも訓練を見てくれていた騎士さんだ。
名前はアリアって言うらしい。
絶対男だと思ってた奴いるだろ！

因みに始まると言っているのは国を挙げての勇者とその従者のお披露目式である。
表向きにはこの旅の目的は勇者が　火水風地　の聖域に一つずつ眠

る“光の一式”を集め、魔王の封印をすることである。
確かに魔王封印には“光の一式”の力が必要なのであながち間違いではない。
だが本当の目的は俺に与えられた少数しか知らない密命である。
それは勇者とともに聖域を回り、“黒の魔導書”と同じようなものを回収し、最終的な裏の目的とは、魔王を封印するのではなく。

?殺す?

さて、お披露目式でも行くか。

……二時間後……

色々な人達の長ったらしいと俺たちの紹介が終わり、むしろ俺からしたら一番の重要事項である従者の発表である。

「いい人が来るといいんだけどなぁー」
「騎士さん達みんないい人だから大丈夫!」
みんなお前にはいい顔するけどな。

確かに心から騎士道精神をたたきこまれているのもたくさんいるがな。
たまーにいるんだよ、従者になれるくらいの腕前があり、野心を持ってるのが。
もし聞き分けの悪い奴だったら秘密裏に>消す<ことも考えなければな。

「では最後に従者の発表をする」

隣の光は素直に楽しみにしているがこっちは気が気じゃない。
「騎士、アリア・ダスト」
呼ばれた騎士は壇上に登り宣言する。
「この旅で勇者様達に尽くすことを騎士の誇りに誓います」
「よかったぁー、アリアか」
あの微妙なローテンションな喋りで確信した。
「知ってるの？」
「ああ、俺の訓練を見てくれた人でな、この旅を一緒に過ごすうえで一番信用に足る人だ」
考えうる限り最高のケースだ！
「へぇーすごい人なんだねー」
これでお披露目式も終わり、この後すぐ旅に出た。

……現在……

と、まぁこんなことがあったわけよ。
「じゃあみんな！旅を再開するよー！」
「「おおー」」
光の号令にアリアとローテンションで応じ、歩き出す。
「昨日は魔物に襲われませんでしたが今日はどうですかね」
アリアの発言は明らかにフラグだった。
「祐樹君アリアさん見て！」
街道を何かが五匹ほどうろついていた。
「ゴブリンですね、人ほどの大きさを持つ魔物です、あまり強くは

ないので練習を積む意味で倒してはいかがでしょうか」
「アリアさんが言うならそうしよっか」
俺たちは群れに近づく。

【ギュイ？】

ある程度近づいたらこちらに気づいたのか、よく分からない鳴き声を発して武器の棍棒を構え始めた。

「さてと、こちらも」
俺はナックルをはめた拳を構え、光達は剣を構えた。

「先制！」
光が突っ込み、フォローにアリアが入る。
「やっ、はっ！」
光は正確に相手の攻撃をいなして確実にダメージを与えている。
アリアは流石といったところで、光が経験を積めるように光が戦っているゴブリンには手を出さず周りを制している。

「なら俺も遠慮なしで！」
ゴブリンが襲いかかってきたので魔力をこめたデコピンで棍棒ごと粉砕する。
【ギュガ！】
そんな感じの声を出して街道の横にある森林の木を薙ぎ倒して吹っ飛んでいく。
いやー、よく飛ぶこと。

「一匹目始末完了♪」
ゴブリン達も流石に怯えている。
構わず加速魔法を唱える。

「アクセル！」
速攻で近づき蹴りを首に叩き込む。
【ゴギン！】
そんな音がして二体目も動かなくなった。
「次は三体目！」
喧嘩キックを頭に叩き込む。
頭が吹き飛んだ。
流れるように四体目の胴体に手刀を横一閃させる。
【ズバッ】
胴体の上と下がおさらばする。

同時に光が五体目を仕留め戦闘終了。
因みに、魔物は死ぬと死体が消えます。

「祐樹君すごいですね！」
「いやー、それほどでも」
褒められるとちょっと照れる。

今思うとナックルつける意味なかったな。
「ま、いっか」
過ぎたことは気にしない主義。
「じゃあ旅を再開しましょう！」
再び歩き出す俺達。

「それにしても」
？光が突然話を始めた。
「私たちの旅はまだまだこれからですね♪」

俺たちの旅はまだまだこれからだ！（後書き）

ちゃんとまだまだ続きます。

暇…だな…

暇だ…

今何してるかって？
歩いてるんだよ。
まったく、馬車ぐらい用意できなかったのかね。

せっかくだし俺の知ってる限りの世界情勢を軽く語ろうかな。

この世界は巨大な大陸と、その南に巨大な大陸の三分の一くらいの大陸からできており、巨大な大陸のほうはもうすでに二十年ほど前からダイン王国が支配しており、小さいほうの大陸は魔王が支配している。

そして俺たちは大陸の中央から西に位置する地の聖域に向かおうと思って歩いている途中。

「あー、歩いてばっかで暇だな」
「歩いたほうが健康にいいよ！それにもうすぐ村みたいなのにつくと思うよ」
ふーん。
「あれ？もうすぐだなんてどうやってわかったんだ？」
「勘♪」
「はぁー」
まだまだ歩きそうだなぁ。

「じゃあ新魔法の開発でもすっか」
我ながら何の脈絡もない発言だ。

「できるのですか、というよりもどうせ暴発するんじゃないですか」
「いや、今までの経験を踏まえての発言だ」
どういうことかって？ふふふ

「魔力を入れすぎても問題のない魔法を作ればいいんだ！」
「例えばどのようなものを」
反応薄くてつまらんがそれはいいとして。
「こう今までのは爆発するようなものだったからやりすぎると周りに迷惑がかかったわけじゃん？」
「そうなりますね」
「だから内側に圧力がかかるようなものとかどうかな？って考えてるんだどう思う？」
「発想は良いですが魔法はイメージを固めることも重要なのでもっとしっかりそのあたりを固めたほうがいいんじゃないでしょうか」

「よしそうと決まったら」
何にしよっかなー
やっぱありそうでない定番の重力魔法とか。
他にはー
俺ドラ〇エ８のギ〇スラ〇シュみたいな感じの魔法かなんかで武器を作り出すみたいなのもいいなぁ。
だがそれは後にして前々から考えていたものがまずあるんだが。

「実験台ほしいなーいないかなー」
【グギャ！】
「またゴブリンだよ」
光は嫌そうだが。
「いた！実験台！」
ご都合主義万歳！

俺の新魔法にお任せあれってな。
「ファイアバレット」
開いた掌にビー玉のようなものが出来上がる。
「あ、それきれいだね！」
確かにビー玉の中に炎の揺らめくところはなかなか幻想的だな。
「いやそうじゃなくってね？」
機能性だよ機能性。
「一定以上の衝撃を与えるとこのガラスっぽい膜が砕けて炎が燃えるんだよ」
これなら（あんまり）被害は出ない！（はず）

「一定以上の衝撃ってどのくらい？」
「軽トラがアクセル全開で突っ込んでくるときくらいかな」
「え？それって使いものになるの？」
「ま、見てなって」

ファイアバレットを真上に軽く投げる。
「あーらよっと」
落ちてきたところをコイントスの様に上ではなく前に撃ちだす。
【ズガン！】
ガラス状の膜が壊れ解放された炎が相手にむかって直進する。
【グガァァァ】
「幅一メートル距離百五十メートルってとこかな」
改良の余地あり。（威力増加の方向で）
「おかしいよね、軽トラがアクセル全開で突っ込むより威力の高いものうったってことだし、ライフル撃ったみたいな音したよ？」
「それに、やはりというような感じですが被害出ましたね」
「細かいことは気にすんなよ、禿げるぞ」
「は、禿げ！？」

「さーて気張ってこー旅の再開だー」
「ちょっと待ってよそれ私のセリフだよー！」

念願の　突っ込み役を　手に入れたぞ

「はぁーつっかれたー」

「もっと元気に歩こうよー」

「光があとちょっとで着くとか言ってからもう三日だぞ」
あとちょっとだからと自信満々に言われてちょっと期待しながらも延々と歩かされ精神的ダメージを負っているこちらの身にもなってみろ。

「やっぱし今日もどこにもつかなそうだなー」
「今度こそあともうちょっとだってばー」

「そんなことよりもあれを御覧になってください」
アリアが突然指差したほうを見てみる。
見えたのはゴブリン六匹が人を囲んでいる。
この辺ゴブリン多過ぎじゃね？
まぁそれは置いといて。

「旅人が魔物に襲われている光景とみた」
と言うよりかはそうとしか見えない。
「むむむ！勇者として見逃せないですね」
「そういやお前勇者だったな」
「冗談きついねー」
「え？」
「え？」
「……」

「……」

「とりあえず近くから様子を見よう」
「そのまま助ければええやん」
さっきのショックで光がなんかおかしくなりながら反論してきた。
「ふっ」
だがそんなの決まってるだろ？
「ここぞというタイミングで助けたほうがかっこいいからだ（キメ顔）」

ということで近くの草むらから観察。

「お前らまとめてかかってこいや！」

「あいつ襲われてるくせに威勢がいいな」
「あの武闘家おそらく腕に自信があるのでしょう」
なるほどしばらくは様子見でよさそうだ。
続きを見よう。

【グギャ！】
棍棒を振りかぶって襲いかかるゴブリンに蹴りで応戦する。
「だりゃあ！」
俺から見てもなかなかいい蹴りだと思うのだが。
ゴブリンはとっさに棍棒でガード。
威力のこもった蹴りの直撃した棍棒は砕け……
なかった。

むしろ武闘家の方が、
「いったー！すね打っていったー！」

とか言ってる始末。

「あ、ゴブリンが群がってきたよ」
「そうだな、しかも棍棒でたたかれまくってるよ」

「痛い！痛いってば！弱い者いじめは良くないよ！本当に痛いのは俺じゃないよ！君たちの誇りに傷がつくよ！」

なんだ、あいつ。
「ただのバカか」
「流石にもう見てられない！」
「あっ」
飛び出してっちゃった（さりげなくアリアも）
「しゃーねぇなぁ」

「ハッ！」
【ズバッ】
光がまだ気づいていないゴブリンの背後から一閃でしとめる。
アリアはサポートに徹する。
一度あいつの本気もみたいものだが。

「死ねっ！」
俺はと言うと技術のかけらも見えない力任せな蹴りで無理やりゴブリンの首をへし折る。
【ゴギャッ】
残り四匹。

「砕け散れ！」

渾身のストレートで頭をそのままの意味で吹き飛ばす。
同時に光がもう一匹仕留めたので残り二匹。

「消滅しろっ！」
一匹の頭をつかみアイアンクロ―でひねりつぶし最後の一匹に叩きつける。

「ふうっ！すっきり爽快&さわやかさっぱり！」
良いストレス解消台だ。

「あんたたちすげぇな」
起き上った武闘家が感嘆のまなざしを込めて言ってくる。
「何だまだいたのか」
「初対面でそれはひどくね！？」
ほんとに気付かなかった。

「いや、まぁ助けてくれてありがとう。俺の名前はドラゴン・スウィッチお前たちの名前は？」

「俺が佐藤祐樹だ」
「光美輝だよー」
「アリア・ダストです」

「あのさぁお前ら旅してるんだろ？」
「まぁそういうことになるな」
「そんならさぁ、俺を仲間に入れてくんねぇか？」
「やだ」
「即答すんなよ！」
なんだごちゃごちゃうるさいやつだ。

「理由を聞いてやろう」

「いやー俺さぁ武闘家見習いでさ、修行の旅に出ようと思って来たわけよ。だがあの有様でね、修行どころか旅だってまともにできやしない状況でな？」

「確かにひどいな」

「別に辛辣な会いの手求めてないから、それでお前たちなら強いし、おまえたちといれば強くなれる気がすんのよ、だから仲間に入れてほしくってさ」

「なるほど」

「仲間に入れてもいいよー」

「まじで！」

「おい、光こんなめんどくさそうな奴仲間に加えても意味ないぞ」

「仲間が増えたほうがたのしいよ！」

「だがなぁ」

「このパーティのリーダーは私だよ！」

「そこまで言われちゃあな、そこそこ（盾として）使えそうだしいっか」

「やったぜ！」

新しく仲間を加え旅は再開される。

「やったね！祐樹君仲間が増えたよ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8802y/

俺が世界の主人公

2011年12月9日01時12分発行